

# 続 櫻の木の下で (22)

## 阿木津 英



今朝、手に取った六月十六日付「図書新聞」の金時鐘氏キムシツネインタビューがおもしろくて——というより、考えさせられている。

金時鐘は、日本が朝鮮半島を植民地化していた時代、昭和四年に釜山に生まれた。日本語を「国語」として育ち、朝鮮半島の風景のなかで日本的な歌「たぶん「うさぎ追いしかの山」や「ゆうやけこやけの赤とんぼ」のような」をたくさん覚えて歌う、皇国少年のひとりだった。戦後、一九四八年四月三日にアメリカ陸軍司令部軍政庁司令部下にあった濟州島で民族分断に反対して起きた島民蜂起、すなわち濟州島四・三事件に関わったのち、政府軍と警察による大虐殺と弾圧を逃れて日本に密航、以後日本に住んで高校教師など勤めるかわら詩を書き続けた。

この詩人金時鐘が、抒情とはそれ自体が批評でなければならぬのに、「日本で言う抒情とは、心的秩序を共有する感情のこと」で、だから「日本人の誰が何を書いても、情感と抒情がいつしよなのです」という。

特攻機で体をふっ飛ばしにいく若者たちが、遺言の末尾に短歌を残す。それはみんな共通している。ちゃんと五七五の音調律に添うように、決まり切ったことを書いている。そこには、自分を死に追いやっているものへの批評がなく、共感させるものだけがある。それを抒情だと言って、涙する人がいっぱいいるんですね。それは、何と崇高な死であるかと死を崇める風潮にちょうど合うのです。

感情とは作られるものだ、感情とはじつは自然な心情の流露ではなく、出来上がった秩序の何かから触発されて生まれている。おのずから機微に触れて共感してしまう、そんな感情を作られるものとして警戒してやまないのは、「なじんで育ったあらゆるものの基調に、五七五のような日本的短詩形文学のリズム感が、抒情の規範さながらにこもっていたからです」。

「五七五の音調律」に添ったリズム感が、批評意識を介在させない情感の共有へと向かわせる。それが日本人の気質をつくっている。そう、金時鐘はいう。

戦後によく言われた奴隷の韻律ということだろう。そういう理由による短歌嫌い、日本語嫌いの人々が、わたしたち世代には多くいた。塚本邦雄が、マカロニを油の溝に流したようなと嫌悪し、句跨がり句割れを多用したあの佶屈とした独特の文体をつくったのも、そういう批判が根底にあったからだった。(現代の口語短歌は、それをたんにテクニクとして受け継いでいるだけである)。わたしも短歌を始める前は、そういう抒情的な「五七五の音調律」による日本語嫌いを無意識のうちに共有していた。

入門書には、歌は抒情の形式であると、誰のものを読んでもそう書いてある。石田比呂志がそう言い、岡井隆の現代短歌入門にも確かそう書いてあったと思う。茂吉も、そうだ。「抒情」という語を見るたびに咽につかえて飲み下せなかった。だから若い頃、自分の目ざしたい歌を「ニーチェのツアラトウストラのような歌」と答えた。

あれからさまざまな過程をたどって、人間の柔らかな情感を以前よりもずっと大切におもうようになったが、歌は抒情の形式であるのかどうか――。

\*

インタビュー記事を読みながら、連想が斎藤茂吉の「打ちてしやまむ」の歌におよぶ。

国こぞる大きき力によこしまに相むかふものぞ打ちてし止や

まむ

『寒雲』

よこしまに何ものかある国こぞる一ひとついきほひのまへ  
に何なる

直ただ心こぞれる今いかづちの炎ほのほと燃えて打ちてしや

まむ

昭和十二年、日中戦争が勃発してまもないころの歌だ。茂吉は「巻末記」に、「昭和十二年に支那事変が起り、私は事変に感動した歌をいちはやく作つてゐる」ことがこの集の特色、とさりげなく誇る。

この「打ちてしやまむ」は、もちろんのこと記紀歌謡の久米歌に由来する。戦争中、全国津々浦々に知らしめられたこの有名な詩句を戦後に学ばせるのは都合が悪かったのか、戦後生まれ世代以降の一般人はこの久米歌を知らない。わたしは初めて読んだのは、「未来」で記紀歌謡合評をやったときだった。三十代始めの頃である。一読、大好きになった。

みつみつし 久米くめの子らが

垣下かきもとに 植はえし 椒はじかみ

口くちひひく、われは忘れじ。撃うちちてし止まむ

神風かみかぜの 伊勢いせの海うみの

大石おおいしに 這はひ廻もとほろふ

細螺しただめの い這はひ廻ほり 撃うちちてし止やまむ

大久保正全訳注『古事記歌謡』講談社学術文庫

笑い出したくなるではないか。そりやあ確かに「撃ちてし止まむ」は物騒だけれど、敗北の痛恨・口惜しきの感情と等価なあの「椒」のびりりと口にひびく感じ、生活の中でなじみのあの感じを体に蘇らせて、次こそはと復讐を誓う。大きな石の下を這いめぐっているただみのように、というところなどは、思わずせくぐまうって這い回る所作でもしたくなるような楽しさである。感覚の蘇るべきひとりひとりの身のうちの空間といったものが、そこにひらかれる。

戦いの前にみんなで唱和し、たぶん踊ったりもしたのだから、現代のわが身のうちにも生きいきとした躍動感を覚えずにはいられない。

それにくらべて、茂吉の「打ちてしやまむ」はどうか。「国こぞる大さ力」「国こぞる一ついきほひ」をばばみ、邪魔するものは「よこしま」である。ゆえに「打ちてしやまむ」という。歌が観念的で、一方的だ。力の強いものはその強さによって、正義を名乗る。久米歌のように戦の互酬性とも言いたくなるような、相互関係が感じられない。

〈直ただ心こころこぞれる今かいかづちの炎ほのほと燃えて打ちてしやまむ〉、これも観念的。久米歌では共同体にあつて共有している記憶や感情や思考さえも、ひとりひとりの身のうちに蘇

らしめるが、茂吉の歌はそのいっさいを禁止する。何にも考えず何も感じず、ただひたすらに一体の「いかづちの炎」となつて、崇高な目標「打ちてしやまむ」に向かうべく、歌は情感を掻き立てようとする。

似ても似つかない「打ちてしやまむ」だ。どちらも「五七五の音調律」を基本とするだろうが、まったく異なる感触をもつではないか。

\*

全体主義を批判して、一人の自由主義者がこの世から去つていきます、と遺書を書いた特攻隊員上原良司の辞世の歌は、つぎのような型どおりといえば型どおりなものだった。

人の世ハ別れるものと知りながら別れハなどてかくも悲しき

「別れるものと知りながら」は一般観念の「別れ」だが、しかし、下の句の「別れハなどてかくも悲しき」には温かく湿った吐息がひっそりと添っている。たつたひとりの息ぎしだ。これが人のこころをうたないではない。

\*

どのような場合にも、「五七五のような日本的短詩形文学のリズム感」が「われわれ」集合体の観念としてあらわれるとき、それは嫌悪すべきものとなるだろう。